

物理的環境変化により生活障害へと発展した一事例

～実行機能障害の要因として照明が与えた影響について～

○村島 久美子(OT)¹⁾ 遠矢純一郎(PHD,MD)¹⁾ 片山 智栄(Ns)²⁾

1) 医療法人社団プラタナス 桜新町アーバンクリニック

はじめに

在宅で認知症の方に接する中で、小さなつまずき・混乱により生活障害へ発展している状況に遭遇することがある。また、認知症は時間の経過とともに状態が変化していく特徴を有しており、進行状況に応じて症状も様々に出現する。在宅で生活されるその人の病状や生活障害ばかりに着目するだけではなく、変化に気づくことが重要である。今回、アルツハイマー型認知症を有し、訪問看護・リハビリ導入から3年以上経過した独居高齢者の認知症に伴う生活障害に住環境、特に照明が与える影響について、作業療法士として多面的に評価したので報告する。なお、本事例の発表はご本人より了承を得ている。

ケース紹介

A氏 90歳代女性 【生活環境】独居。マンション 【家族構成】遠方に子供在住、疎遠
【診断名】アルツハイマー型認知症、高血圧、脂質異常症 【サービス利用状況】訪問看護・介護 各週1日
【IADL】外出を伴う活動（買物、定期受診）の実行にムラがある。手続き記憶の範囲で行う活動はスムーズ。
【BADL】自立。入浴の間隔にバラつきがあるが、定期的に保清動作は行っている。
【身体機能】下肢筋力低下あり、片脚立位時要支持物。屋外歩行時T字杖使用。歩行後、息切れが顕著。
【認知機能】短期記憶障害、見当識障害(日付)。 覚醒良好であり、他者との会話もスムーズ。

ご本人の気持ち：ひとりで出来ることは、一人で頑張りたい。ひとは気楽だが、寂しい時もある。

作業療法士としての対応

ある日突然・・・

- 冷蔵庫に同じものが複数購入・保管されている。(例：惣菜、パン、ヨーグルトなど)
- シンクに残った食器が積み上げられている ●シンクが少し臭う

初動対応	わたしの視点
<ul style="list-style-type: none">●食材のため込みや食器洗い動作不可 →認知症の進行に伴う生活障害の出現。●介護保険サービスの追加導入検討。 訪問介護を強化し、食器洗いや賞味期限の管理を行う。	<ul style="list-style-type: none">●アセスメント：「突然」の変化に対して… → 脳のイベントは？ 内部疾患の増悪は？ 栄養状態の悪化？ 環境の変化は？（水道、電気の未供給状態） （不審者からの電話や訪問など） KPの不在・不調？（家族の状況変化）



<アセスメント結果>

- キッチンの蛍光灯が切れ、真っ暗な状態
→キッチン内の滞在時間が大幅に減少。そのため、食器洗いも冷蔵庫の確認も出来ていなかった。
食器洗いをしていないために水を流すことが減り、結果としてシンクの臭いの原因となっていた。

<支援>

- 1) 切れた蛍光灯の交換：交換を試みたが、蛍光灯フレームの取り外しが困難。
- 2) 蛍光灯の代用：キッチン内にある他の蛍光灯を代用したが、手続き記憶として定着化していなかったため、代用としての活用は困難。
- 3) 元の蛍光灯を交換：まず最初に食器洗いが改善。その後、冷蔵庫にある惣菜の重複が改善。

【現在の様子】 ADL・IADLは元の状態に戻り、現在も独居生活を継続。
体力の衰えで難しくなってきた買い物に対して、適切な支援を提供している。

まとめ

- アルツハイマー型認知症の進行は緩やかといわれており、いつの間にか行うことが難しくなる活動もある。ただし、出来なくなった活動を、すべて認知症の進行による影響と考えてはいけない。
- 活動が出来なくなった場合、支援を導入するよりも前に多面的な評価（機能・環境・疾病）を行う必要を再認識した。
- 認知症に限ったことではないが、ケア方法やサービスがパターン化・ルーチン化することがないよう、支援者の意識を常に高く保つ必要がある。